

養育院と谷中 前編 谷中の大久保一翁

坂部明浩（谷中在住，養育院・渋沢記念コーナーボランティア，介助&文筆業）

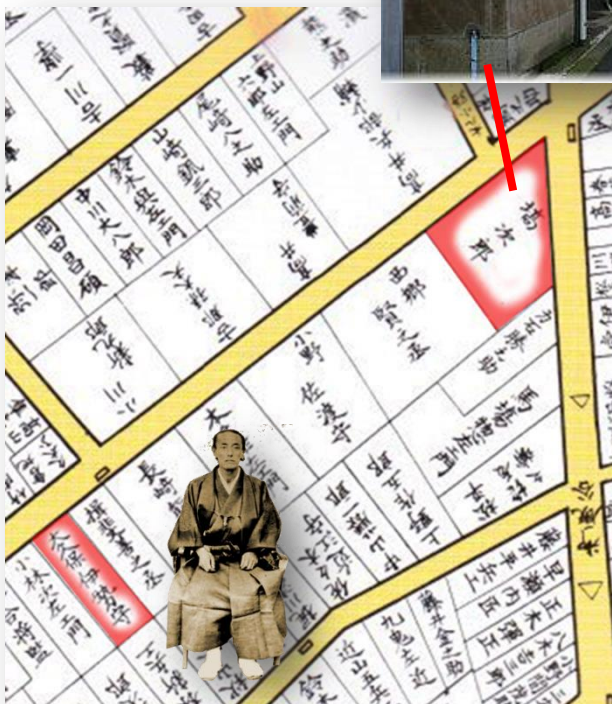
東京の下町、台東区谷中（やなか）というと、本通信十六号でも紹介されているが、了侘（ごん）寺に、養育院で明治、大正初期に亡くなった引き取り手のない無縁仏のお墓があり、いまも手厚く管理されている。



了侘(ごん)寺の
東京都養育院慰霊碑



暗殺現場である塙次郎邸跡前
(東京都千代田区九段)



東都番町大繪図(安政 5)
塙次郎(=塙忠宝 はなわただとみ)と
大久保一翁(伊勢守)の屋敷



養育院を創った、のちの
東京府知事 大久保一翁

今回、その谷中にさらなる発見があった。舞台は江戸時代に遡る。文久二年、谷中の地（了侘寺より七、八分の一乗寺隣）で、大久保一翁（当時は大久保越中守）が近藤七郎右衛門の屋敷を授受したという記録が残っていたのだ（『東京市史稿（市街篇四六）』）。

もちろん、この記録をもって即、よく知られている番町（東京）の大久保一翁邸から本格的にこちらに引越したかどうかは分からない。また、その年は幕臣の大久保一翁にとっても浮き沈みの激しい年で十一月には左遷もあった。

が、一方で、この時期には、文久二年十二月に盲目の国学者塙保己一の息子で、国学者の塙次郎が尊王攘夷派によって自宅前で暗殺されている。

それが番町の大久保一翁の屋敷と同じ並びの数軒ほどの距離。

その意味では一翁は左遷されたとはいえ、身の安全を考え、谷中の地に移住した可能性も大いにある。

どんな状況にあっても、大政奉還論の先駆けになる提案をするなど、つねに先見の明をもつ大久保一翁にあってみれば、谷中の地でも頭脳はフル回転。江戸城明け渡しを早々に考え、その混乱後の「江戸」に行倒れの者などが増えることも想定されたであろうし、その受け皿として、後の養育院の場所の候補を、江戸の頃から構想していたと考えることもあながちあり得ないことではなさそう。



不忍池



ちなみに、この谷中の大久保一翁の屋敷(現・谷中一丁目)から、上野時代の養育院(護国院)までは歩いて五分の距離である。

小石川谷中本郷繪図(萬延2)

真ん中より右の「上ノ」とある辺りが文久2年になって、大久保一翁の屋敷となった。真ん中下の「上野山内」表示の辺りが「護国院」。



■本稿は『江戸切絵図を歩く』の中の菊地明氏の論考「土方歳三の運命を決した道」と直接の助言を谷中の大久保一翁についての執筆の端緒とした。感謝したい。